

日本ボーイスカウト北海道連盟だより 150号



# 斧の響き



二人づくりは我々の社会的使命＝  
明日を担う子どもたちを、私たちが育まないで誰が育むのか！！

ボーイスカウト北海道連盟

連盟長 三浦 武



## 《厳しい環境の中で・・・》

指導者の皆さんが、日々研鑽されておられるスカウト技能研修の成果をスカウトたちに提供していただければありがたいと思います。

我々のスカウト活動を取り巻く環境、非常に厳しいものがあります。

まず少子化問題で、私たちの本尊は、子どもたち、スカウトです。このスカウトが段々減ってきていることは本当に悲しいことですが、このような状況の中で皆さん方が一生懸命一人でも多くのスカウトを育てたいと頑張っていたいただいおられることに頭の下がる思いがします。

特に隊指導者の方は直接スカウトに接しておられ、いろんな悩みが多いと思います。私もカブ隊長、ボーイ隊長、シニア副長をして実際に多くのことを悩んだこともありましたが、子どもたちが成長する姿を見る楽しみがありました。皆さん方も同じかと思えます。

最近女性指導者の方が増えてきており、家庭をもちボランティア活動をされていることは本当にありがたいと思っております。

少子高齢化が進んで行き、女性の方々に男性の方と同等に活躍していただかなければならない時代に入ってきております。お母さん方が一生懸命子どもさんを育て、さらに社会教育の一環であるボーイスカウトの活動をしていただくことが益々必要になっていると思っております。

そして、バブルの崩壊後経済的に日本の国もちょっと落ち込んでおり、これがスカウト活動にも影響を及ぼし、経済的な面で入団できない悩みがある方々もたくさんおられるようで、なんとか早く経済が回復することを願っています。

ボーイスカウトの運動を進めていくために重要な役割を果たしている指導者の方が少なくなっており、皆さん方もそれぞれ地域で後継者を育てることに悩んでいると思いますが、一人でも多くのボランティアの方を探し、我々の活動の中に入れていただき、子どもたちの育成をしていくことが必要であります。

## 《人々の役に立つスカウティング・・・》

今日的難題が山積していますが、北海道連盟は新年度に入りまして、理事長、コミッショナー、事務局長中心に事業の展開に一生懸命努めております。

今年度最大のイベント「カブラリー」が、9月13日から15日に滝野の青少年山の家で行な

われ、カブスカウトたちが沢山集まり私も13年ぶりで参加させていただき、子どもたちの元気な声を聞き、若手指導者の方が一生懸命プログラム作りから企画、実施展開までやっている姿を見まして私も元気をもらいました。

このようにカブスカウトの年代は3年間あるわけで、このカブラリーのように皆が集まって全道各地に仲間がいるのだということを意識し合うということが、今後この活動の発展にもつながるのです。子どもたちが一緒に大自然の中で汗を流す活動をすることが精神的にも肉体的にも素晴らしい体験になると思います。

団のいろいろな事情があるかも知れませんが、より多くのスカウトたちが参加できるよう隊や団において配慮をお願いします。

最近は大雨、台風による洪水、土砂崩れなど今まで考えられない異常気象の影響が増えているのではないかと感じています。自然は昔から私たちに恵を与えてくれる、しかしその反面試練も与えるという風に言われております。私たちは自然に対する対応、ありがたさをいま一度考えなければなりません。

北海道のベンチャースカウトたちが、伊達市の北黄金貝塚公園で10月11日～13日の2泊3日、縄文文化を体験する中で、「～自然と共に生きる～命をいただく：感謝と共存 《食べる》」をテーマにした「トライアルキャンプ」を行いました。

「縄文人からの伝言」というある考古学者が書いた本を読んでいたならば、今から1万年位前、私たち日本人の祖先縄文人はかなり豊かな生活をしていました。灯りも、移動や通信手段も、テレビも、文明の機器も、十分な食べるものも無いが、自然の恵を受け、自然と共生しながら豊かな志のある暮らしが営まれていました。

しかも、集落などはかなり海岸のそばから離れた安全な場所に作り、貝塚を調べると当時の豊かな生活状況が分かり、私たちの遙か昔の方が自然の中からはいろんな事を学んでいました。私たちは文明人と称して胡坐をかいておるが、もっと自然に学ぶことが多いのではないのでしょうか。

私たちのボーイスカウト活動の主眼は野外活動で大自然の中で行動し活動し学びます。教場が建物ではなく大自然で、自然を大事にする教育が、

最近のような自然災害が起きる状況のなかで、我々ボーイスカウトは自然を大事にしながら自然に学ぶ活動をしています、ということをしてPRしていただきたいと思います。

ボーイスカウトで欠かせない技能の一つであるロープワークがありますが、韓国でホテル火災があった時に宿泊していた日本の方が、シーツを切って結んで垂らして助かったという新聞記事を読んだ記憶がありますが、ロープワークの知識がなければ出来ません。小さい時からいろいろな事を学んでいるボーイスカウトで勉強した方かなとも思いました。

本州の方で軽飛行機に乗った親子が山に不時着した時に、子どもがボーイスカウトでの経験を活かして地図を読んで等高線をみて、助かったという新聞記事がありました。

私が住んでいる所の郊外にあるイルムケツプという山では5月・6月は竹の子狩りに来る人の遭難騒ぎが時々おきます。ある時捜索のことを書いた新聞記事の最後に「ボーイスカウトはコンパスを使うことを勉強しているようだ、だからこのグループの中で何人かでもこの知識があれば助かったかもしれない」と書いた、ボーイスカウトに見識を持った記者の方がおりました。

昔、我々は薪で飯を炊いたのは当たり前でしたが、いま火を焚ける場所は限られてしまっています。阪神大震災の時、ボーイスカウト経験のある人が瓦礫の中から倒れた木材を集めて火を起し、お米などを持ち寄り鍋釜を探してきて炊事をして生き延びたという話がありました。

皆さん方は、スカウトたちにこのような話を通じてスカウト技能修得の大事さを伝えるとともに、特に、お父さん、お母さん方に、このような事例を話していただき、ボーイスカウトは日常の活動を通じて、頭の中だけでは実際体験しないと分からない、生きるために必要な技能を身に付けているのだなということ知っていただくように地域の皆さんにPRしていただきたいと思っております。

### 《世界的に広がるスカウティング》

私どもの活動は、非常に世界的に広がっています。世界のスカウト人口は162か国3,600万人で、アジア太平洋地域が一番多く2,980万人。アジア太平洋地域の諸国は戦後独立した新興国が多く経済的に大変ですが、子ども達の教育をしなければならないのはどの国も同様で学校教育は校舎を建てたり施設を整備したりお金がかかりますが、ボーイスカウトは社会教育とし

て野外で活動しますので、学校教育の代替わりではありませんが、アジア・アフリカで増えており、インドネシアが2,980万の内、2160万。インドが330万、フィリッピンが170万、バングラデシュが96万、タイが83万、パキスタンが63万と新興国で子ども達の教育にボーイスカウトが一定の役割を果たしています。

日本は13万4千人ですが、韓国は日本の人口の半分で19万おり、学校の中で部活のような形をとっています。ボーイスカウト発祥の国イギリス53万、昔とそんなに変わらずキープしています、以前アメリカが世界一で500万人の登録がありました。290万人でやはり減っています。新興国は増えていますが、先進国は経済状況などいろんな面でちょっと落ちているのかなと思います。

来年はご存知のように第23回世界ジャンボリーが山口県山口市のきらら浜で開かれます。約

3万人近くのスカウトが世界100カ国以上から集まり、北海道連盟から1コ隊は派遣したいとコミッショナーが皆さん方をお願いをしております。

ここでの交流や体験は子どもたちにいい機会ではないかなと、このように思います。皆さん方もひとつお父さん、お母さんに教育の先行投資だと考えて説明させていただき、将来にいい経験になったと子どもに感謝されますよと話していただきたい。

### 《有用な人材を育てるスカウティング》

話は飛びますが、1969年初めて月面着陸したアームストロング船長はイーグルスカウト、日本でいう富士スカウト、オールドリン宇宙飛行士は1級スカウト、当時宇宙飛行士の90%がボーイスカウト上がりだということです。

宇宙飛行士の野口さんも選抜されたときに、「私はボーイスカウトのお陰で宇宙飛行士になりました」新聞に書いてありました。特にボーイスカウトでのチームで仲良く協力しあうということを学んだと書いてありました。宇宙船を操縦する時には、やはりチームワークが大事なのです。野口さんは、我々の仲間、大先輩で希望の星です。ボーイスカウトのアンバサダーになりPRをしてくれることになっています。

ボーイスカウト運動、ボーイスカウトの教育活動は、今の時代に必要で世界的にはどんどん広がっているのです。今、日本では停滞気味ですが、皆さん方の力で、北海道から頑張っていくのだぞという産声を上げていきたいと思っております。

B-Pのラストメッセージに、「私は、非常に

幸福な人生を送った。きみたちみんなも、同じように幸せな生涯を送ってもらいたい。金持ちになっても、社会的に完成しても、幸福になれない。幸福を得るほんとうの道は、他の人を幸福にすることにあり」書いてあります。

少年団日本連盟初代総長後藤新平が亡くなる前に、「金を残して死ぬ者は下だ。仕事を残して死ぬ者は中だ。人を残して死ぬ者は上だ。」と言っているのです。

今は、自分さえよければいいという風習が多いのですが子どもたちにB-Pや後藤総長の言われている意味をしっかりと教えていただきたいと思っております。

これからの21世紀、22世紀を支える少年たち、子どもたちを私たちが育てないで誰が育てるのでしょうか。人づくりが一番大事なことです。課題は沢山ありますけれど、皆さん方と共にその「人づくりに尽くす」という目標をもって進んでいきたいと思っております。ご協力をお願いいたします。

〔平成26年10月26日第56回全道スカウティング研究協議会 連盟長式辞から〕

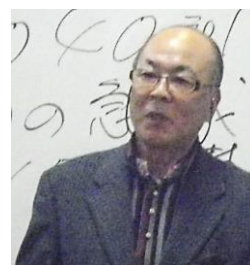


# 「若い風・オープンフォーラム」 “北海道のスкауティングを語る” 2014

「ともに語ろう！ 起こそう！ スкауティングに若い風を！！～考えよう 行動しよう 北海道のスкауティングそして青春～」のテーマで、11月29日・30日に開催されました「若い風・オープンフォーラム」での基調講演（キーノートスピーチ）の記録

## 君はなぜスカウティングを行うのか！！ ～君は何をめざして生きていくのですか～

小山 忠弘 ふるさと再生塾塾長  
(元札幌国際大学学長、北海道教育委員会社会教育課長)



### ＝青年とは年齢の若さで決めるものではない＝

数え77歳の私が「若い風」のキーノート・スピーチを行います、一度は耳にしたことのあるサミエル・ウルマンの「青年賦」を今一度思い出してみましょう。

『青年とは年齢の若さを指すのではない 精神の澁刺さをいうのである

青年とは豊かな頬 赤い唇 柔らかい肢体をいうのではなく

意思の力 創造力 感激性を指すのである

年齢を重ねるだけで誰もが老いてゆくのではない

理想を失い自信をなくした時にのみ人は老いる

年齢は皮膚に皺を寄せるが 情熱を失うとその人の魂に皺がよる

常に明るい希望を持ち 勇気凛々未来の夢に挑戦する人 生命の歓喜を神仏に感謝する人であれば

十六歳であろうと七十歳であろうと その人は青年である

春たけなわの新鮮さこそ 青年の魂の本当の姿である』〔複数の訳文があります:編者註〕

ということ踏まえると、私はまさに青年真っ最中だと自負しています。情熱や理想を失うと、たとえ中学生であっても、その人はもはや老人なのです。今日ここに集まっている皆さんには、魂の瑞々しさがあることでしょう。

さきほど、皆さんが歌われた北海道連盟歌で、私がとても感動した歌詞の一節があります。

一番の「若い命がほとぼしる」二番の「血潮は燃えて肉踊る」です。今日は二番の「血潮は燃えて肉踊る」を心に留めて、ガンガン議論していただきたい。自分が納得できなかったり、「新しい風」の一定の方向性が出なければ、夜通し真剣な議論をして欲しいのです。それくらいの体力を皆さんは持っているはずで、そして三番の「誓わん、奉仕と友情を」の言葉を実践するため、「自分は一個の石ころになれるか」ということをこの2日間心に留めておいてください。池でも沼でも海でも、石ころを投げると波紋が広がります。自分はどのような石ころになるのか。その石ころをどこに向かって投げたら、どれだけ波紋が広がって行くのか考えていただきたい。

今日のこの「若い風」は、皆さんが本当にウルマンが唱えている、青年であるかどうか試されているのです。

### ＝ひとつの強い思いがあれば、必ず実現できる＝

私が中学生の頃「意思のあるところに道がある」という言葉が好きでした。私事で恐縮ですが、私は小学校5年生の頃から学校の先生になりたいと思っていました。理由は、私が通った小中学校は1棟に小学校2教室中学校1教室という複々式の田舎の学校でしたから、先生は、新制高校を卒業したばかりの代用教員でした。数学の計算や漢字など間違えて、生徒から指摘されるということもしばしばでした。その頃から、きちんとした先生の資格を持って田舎の子どもたちに教えたいと思いました。高校に入る頃の私の家は、11人家族で食べるのがやっとという極貧の生活状態でしたから、父親に高校に行かせて欲しいと言い出せなく

て、入試選抜試験が始まるギリギリの3月始めに、恐る恐る話すと「お前、何を考えているんだ。この家の状態を見たら、高校なんか行けるはずがないだろう！」と怒鳴られ、それまで父親に殴られたことがなかったのですが拳骨を張られました。しかし、私の将来を心配して担任や校長先生が父親を説得してくださり、「家からは一切仕送りはできないが、自分でやれるなら行ってもいい」という許しを得て、一人札幌へ出ました。

幸い札幌南高校の給仕（事務生）として昼間働き、夜は定時制で勉強しました。給料は5,000円、授業料が800円で、下宿代が5,500円でしたから毎月1,300円足りません。それを補うため9時半に授業が終わってからアルバイトをしました。中学を卒業するとき、英語は中学1年の教科書の半分しか習っていなかったため、日曜日に南高の英語の先生の家に行って煙筒掃除や家の周りの後片付けなどしたお駄賃代わりに英語を教えてくださいなどして、大学に入り高校の教員になりました。

振り返ってみると、人間はひとつの夢や願いを持ち、諦めなければ、必ず実現できるものだということが、体験を通して理解できたのです。どんな小さいことでもよいのです。希望の種を蒔いていけば必ず芽が出るのです。

あなた方の知恵と情熱で、北海道のボーイスカウト活動の蘇生は必ず実現できるはずです。

## ＝投げた石ころの波紋がどのように広がるのか＝

放課後は学習塾だ、水泳教室だ、英語塾だ、スポーツ少年団だというように、小中高生は多忙だと言われています。その上北海道の小中学生は全国学力テストの成績が、下位から何番目かの低さのため、先生も教育委員会も点数を上げるのに躍起になっています。しかし頭から「勉強して成績を上げろ」と言われても、何のために勉強しなければならないのか、自分がその気にならないと、真の学力はあまり身に付かないものだと思います。生きた知識として身に付くためには、子どもの時から色々な体験をすることが必要です。

知識と体験と結びついた時に、人間は創造力が豊かになるのです。

そういう意味からも、ボーイスカウト活動は、体験を通して物事を見、考えるということを手順踏んで積み重ねているのですから、素晴らしいことだと思います。しかし活動している本人も周りの人たちも、その良さをよく理解していないと思います。

今やっていることが、自分の人生を築く上で大事なことなのだと自覚することです。皆さんが北海道の「新しい風」を吹かせるための「一つの石ころ」として、どこで、どのようにその石ころを投げて波紋を広げられるかということ、常に考えて行動して欲しいのです。

## ＝団体活動をしていない子どもがまだまだたくさんいる＝

先ほど、扇間コミッショナーが、全国的にボーイスカウトの人数の減少していることについて触れていましたが、これはボーイスカウトだけの問題ではないのです。少子化の時代ですから絶対的に子どもの数が減っているのです。だから、どの少年団体も参加人数は今減ってきているのです。

しかし、よく見ると地域にはまだまだ少年団体に入っていない子どもがたくさんいるのです。団体活動の良さを知らない子どもたちがいるのです。団体活動をするよりも塾に行くことを勧める親がまだ多いことも事実です。

そこで、皆さんはボーイスカウトに入っていない地域の子どもたちに、どのようにしてボーイスカウトを認知してもらい、魅力を感じてもらえるのか、そのための知恵を出し合って欲しいのです。

日々子どもたちに気軽に声を掛けているのか、触れ合う機会づくりをしているのか、地域の行事などで子どもが集まる時には、積極的に顔を出すようにしているのか、という具体的な動きがポイントになります。ボーイスカウト主催の活動ではないので、顔を出さなくてもよいというような意識は論外のことです。

団体活動をしていない子どもたちをスカウトすることが、「若い風」の使命なのです。

## ＝ボーイスカウトの魅力を伝えていますか＝

私の3人の息子が小学生の頃、ボーイスカウトに入れようかと考えたことがありました。それは、礼儀正しく、きびきびと活動していて、制服も格好よかったからです。地域の中でどこの少年団体にも入っていない子どもたちは、ボーイスカウトの団員を見て、どのように感じているのだろうか。制服が格好良いと思っているのだろうか、色々な体験活動を一緒にしてみたいと思っているのだろうか、自分も入ってみようかという憧れを持っているのだろうか、地域の子どもたちに率直な感想を聞いて欲しいのです。あなた方がリーダーとして、まずは地域の子どもたちの中に飛び込んでいく努力が必要なのです。

私の家の前を小学生が朝夕通って行きます。私は、必ず声を掛けるようにしています。「おはよう」とか「今帰ってきたの、おかえり」とか言っていると、そのうちに自分が仕事をしていて挨拶するのを忘れていると、子どもたちの方から「おはよう」と大きい声が掛かってきます。「おお、おはよう。今行くの?」「はい」という会話ができるのです。

皆さんは地域の中で、子どもたちと同じ目線で接しているかどうかです。日常生活では制服を着ているわけではないので、普段から子どもたちに優しく接していると、「あ、あのお兄ちゃんは優しいよね」という気持ちを抱かせることによって「お兄ちゃん、何やっているの」「僕はボーイスカウトに入っているんだよ。今度こういう集まりがあるから、ちょっと見に来ない?」というような、さりげない切っ掛けづくりが大事な活動なのです。地域の中で、影響力のある人間になって欲しいのです。

## ＝2040年問題でボーイスカウトの果たす役割は＝

皆さんはこれからも北海道で生活すると思いますが、2040年問題という大きな課題を抱えて生活しなければなりません。2040年になると、北海道の全市町村の人口が激減することが予測されています。かつて212市町村ありましたが、平成の大合併で179に減りました。その中で人が暮らしている集落の数は、およそ3,700カ所です。このうち住民の半数以上が65歳以上の「限界集落」と呼ばれる集落はおよそ600カ所です。そのうち人口が30人以上40人未満の集落が308カ所で、やがて生活道路の管理や冠婚葬祭などの社会的共同生活の維持が困難になり、そのままでは10年以内に消滅する可能性があると言われています。

### 1、あなたは限界集落化するふるさとをどうしますか。

私は「ふるさと再生塾」という活動をしています。北海道のような四季折々の美しい風景と豊かな自然、海、山、川がある、そういう故郷が消えてしまっているのだろうか、札幌に人口が集中することを続けていると、かけがえの無い北海道が消えてしまうのではないかという強い危惧感を持っています。

生活の豊かさ、便利さを求めた結果が、皮肉にも過疎化現象をもたらしたのです。皆さんの市町村のことを考えてみても、子どもの頃いろいろな商店が立ち並び賑やかな通りがあったと思いますが、車の流れを良くするためにバイパスを通したことにより、商店街が寂れてしまったということを見ていると思います。また郊外に大型店舗ができたことにより、高齢者が買い物難民になるという深刻な問題が生じているのです。開発という便利さが都市への人口集中をもたらし、同時に地方が衰退して限界集落を生み出したのです。

現在莫大なお金をかけた札幌までの新幹線の開通を待ち望んでいますが、函館・札幌間は8割近くがトンネルだと聞いています。雄大な北海道の景色を眺めることはほとんどできません。しかも新幹線が走ることによって、地方の住民に親しまれ、北海道の特色ある生活文化を築いてきたローカル線が廃止されるのです。そういう状況の中でボーイスカウト活動はどうあるべきか、地域の安全・安心の住みよいまちづくりのために、どのような役割を果たさなければならないのかという、広い視野での発想が求められているのです。この2日間の皆さんの知恵や行動が、それぞれの地域興しに繋がるとともに、少年団体活動の活性化と役割の見直しにもなるのです。

### 2、積極的な世代間交流を推進しますか。

北海道は2035年になると、世帯主が65歳以上の高齢者世帯の割合は、全世帯の43.3%。このうち、独居高齢者の割合は41.8%（全国5番目）となります。北海道は広くて若い国だと思われていますが、そうではないのです。このように高齢化・孤立化が進む地域の中で、ボーイスカウトはどういう役割を果たさなければならないのでしょうか？私たちは青少年団体活動をしているのだから、独居高齢者が増えてもあまり関係ないと思いますか？

北海道連盟歌の三番の歌詞に「誓わん、奉仕と友情」とありますが、誰に対する、どんな奉仕なのか考えてみたことがありますか。地域の中で生きるといえることは、世代間の交流がないとその地域は温かい血が通わないということになるのです。温もりの心が通わないのです。若者は若者、高齢者は高齢者というのではなくて、高齢者と若者が積極的に交流してこそ魅力や活力のある地域になるのです。

日常的に地域の同世代の人たちや下の人たち、上の人たちとの交流を通して、自分はボーイスカウトの一人として「今、私は地域で何ができるのだろう」「僕にとって、今やることは何だろう」といつも考え続けて行動して欲しいのです。ボーイスカウトは「地域で魅力がありますか、知られていますか」という問いかけはそういう意味なのです。



### 3、20～30代女性が激減することへの対応ができますか。

市町村によっては70%ぐらい減るところもあります。20代～30代の女性が減るということは、その世代の男性の結婚相手が減ることです。結婚しなければ子どもは生まれません、子どもが生まれなければその市町村だけでなく、北海道の存続ができなくなるのです。

いうまでもなく結婚は本人の自由意志です、しかし、人間として生まれたからには結婚して家庭を築き、子どもをもうけて幸せな家族を育むことが、郷土や国の発展に繋がるのです。もちろん結婚したら必ず子どもが生まれるという保障はありませんが、子どもを産んで家庭を持ち、そして地域を支え、郷土を支え、国を支えるというのは人間としての責務なのです。私は基本的に、社会を維持するためには男性と女性は結婚し、家庭を持ち、子どもが生まれ、育児をし、教育をするという営みが郷土発展に必要なプロセスなのだと思います。

### ＝今の子どもたちの問題状況！！＝

宮沢賢治の「雨ニモマケズ」という詩があります。宮沢賢治の生き方の信念でもありと同時に、リーダーを目指す者の心構えについても触れているような気がします。パロディの詩と対比して考えてみてください。

雨ニモマケズ	雨にも当てず
風ニモマケズ	風にも当てず
雪ニモ夏ノ暑サニモマケヌ	夏の暑さにも当てず
丈夫ナカラダヲモチ	弱い体に超ミニスカートやルーズソックスをまとい
慾ハナク	茶髪にピアス、Yシャツの裾を外にだらりとなびかせ
決シテ瞋ラズ	キーの束をぶら下げたズボンを腰からはずれるように履き
イツモシヅカニワラッテキル	意欲も気力もなく、ぺっぺっと唾を吐き散らしながら
一日ニ玄米四合ト	いつもぶつぶつ不満を言っている
味噌ト少シノ野菜ヲタベ	1日に何本ものジュースやコーラを飲み
アラユルコトヲ	ご飯も食べずにインスタントもので済まし
ジブンヲカンジョウニ入レズニ	毎日目標を持つこともなく
ヨクミキキシワカリ	携帯電話に夢中になって頓狂な声をあげ
ソシテワスレズ	朝から地べたにペタリと座り込み
野原ノ松ノ林ノ蔭ノ	集会があればじっと立っていることができずにすぐ倒れ
小サナ萱ブキノ小屋ニキテ	あるゆることを自分の為だけに考え顧みず
東ニ病氣ノコドモアレバ	与えた作業はぐずぐず
行ッテ看病シテヤリ	注意散漫直ぐに飽き
西ニツカレタ母アレバ	そして一切の責任を持たず
行ッテソノ稲ノ束ヲ負ヒ	とかく問題の多い都市化の中の最も豪華な部屋にいて
南ニ死ニサウナ人アレバ	東に病人がいれば医者が悪いと言い
行ッテコハガラナクテモイハトイヒ	西に疲れた母あれば養老院に行けと言い
北ニケンクウヤソショウガアレバ	南に死にそうな人あれば寿命だと言い
ツマラナイカラヤメロトイヒ	北に喧嘩や訴訟があれば遠くから眺めてかかわらず
ヒデリノトキハナミダヲナガン	ひでりの時は冷房を掛けて昼寝をし
サムサノナツハオロオロアルキ	寒さの夏はヒーターを掛けてゲームをし
ミンナニデクノボートヨバレ	仕事を頼めば「勉強」を隠れ蓑にテレビを見続け
ホメラレモセズ	手伝いもせず
クニモサレズ	叱られもせず
サウイフモノニ	怖いものは全く知らず
ワタシハナリタイ	そういう現代っ子に誰がした

これはパロディですが、こういう子どもに育てた責任は親にあります。

周りが塾に行けばうちの子も塾に通わせる。つまり、自分の子どもをどのように育てたいという信念が無いのです。なんでも周りと同じようにしないと「うちの子だけいじめられたら困る」という具合に、家庭教育の信念がないのです。

幸いなことに皆さんはボーイスカウトに所属して、きちんとした教育訓練を受けており、結婚して子どもを育てる時に、そうした経験やものの考え方が生かされていくのだらうと思います。

## ＝三つの必要な体験＝

私は、現代の子どもたちに最低限三つの体験が必要だと考えていますが、それは何だと思いますか？皆さんから挙げてみてください。

「感動する体験」

「物事をよく考える体験」

「自分を主張できる体験」

「集団で生活できる体験」

「受身でなくて自分から積極的に働きかける体験」

「遊び体験：ごっこ遊び」

「無機質でなくて人の表情や温かさが伝わる、対面による会話のできる関係」

「積極的に色々な人と関わる」

「何事にも挑戦してみる」

「お互いに競い合うことによって磨かれるという体験：切磋琢磨」

皆さんから出された意見の中にありました「嫌なものを避けていくという生き方」、これはいろんなところで今後支障が出てきます。

人間には感じの良い人もいるし、悪い人もいる。背の高い人もいるし、低い人もいる。髪の毛の黒い人もいるし、赤い人もいる。障がい者もいるし、健常者もいる。幼児もいるし、高齢者もいる。いろんな人がいるから人間はすばらしいのです。その人が地域で暮らす時に、嫌な思いをしないで暮らせる状態をノーマライゼーションといいます。

ノーマライゼーションという言葉をしっかり覚えておいてください。子どもの時からノーマライゼーションの理念を、親も先生もしっかり教えていないから、いじめが無くならないのです。

金子みすゞの詩「みんなちがってみんないい」を覚えていますか

### わたしと小鳥と鈴と

わたしが両手をひろげても、お空はちっとも飛べないが、  
飛べる小鳥はわたしのように、地面（じべた）をはやくは走れない。

わたしがからだをゆすっても、きれいな音は出ないけど、  
あの鳴る鈴はわたしのように、たくさんうたは知らないよ。

鈴と、小鳥と、それからわたし、みんなちがって、みんないい。

皆さんから大変良い意見を出してもらったので、今の青少年に体験して欲しいことをまとめて三つに整理しますと。

一つ目は、**忍耐の体験**です。

我慢強さを身に付けるということです。

二つ目は、**飢えの体験**です。

家庭の冷蔵庫を開ければ食べ物がある。コンビニに行けば何でもある時代に、食べたくても買えない、手に入らない。そういう飢えの体験です。

三つ目は、**貧乏の体験**です。

高額のお小遣いを貰ったり、バイトして稼いだりしてお金を持っていますが、買うお金がなくて、その日食べるものも、着るものも買えないような困窮の体験です。

家庭や学校ではこのような体験をさせることは困難ですが、ボーイスカウトはまさにこうした体験の積み重ねをしていることに価値があります。

文部科学省が青少年の体験活動について調査をした結果、小中学生の時代に様々な体験活動をした子どもほど、後になって学力が伸びるということがわかりました。

小さい時から勉強、勉強、勉強とやっているより、体験活動をした子どもの方が大人になってから、その



後の生活に良い影響を与えることが明らかにされています。

ですから、ボーイスカウト活動を、単に自分が好きだから入っているという個人的な捉え方ではなく、自分たちが今やっていることは、これからの日本の青少年を育むうえで大事な役割を担っているのだと自覚することです。

「自分の行動が、後に続く子どもたちに繋がるのだ」というプライドを持って活動してほしい。

## ＝人間にとって大事なこと～富良野塾起草文から～＝

倉本聰という人の名前を聞いたことがあると思いますが、倉本聰さんは、日本の代表的な劇作家です。富良野に富良野塾を立ち上げて、俳優を養成していますが、その建物の入り口に次のような文章が刻まれています。私が初めてそれを見た時、大きなショックを受けました。

あなたは文明に麻痺していませんか	石油と水は どちらが大事ですか
車と足は どちらが大事ですか	知識と知恵は どちらが大事ですか
批評と創造は どちらが大事ですか	理屈と行動は どちらが大事ですか
あなたは感動を忘れていませんか	あなたは結局何のかのと言いながら
わが世の春を謳歌していませんか	

これを読んであなたたちの感想を聞かせてください。

### 「理屈と行動はどちらが大事ですか」

僕の場合はどちらかというと批判、文句ばかり言って、あまり実践的、行動していない。批判論者になっているのではないか、要するに、本質を考えて解決しようとしないうか、逃げているんじゃないかなと思っています。

僕は、去年大学に入った時にスマートフォンを持ち始めて、便利な道具を使うというより、むしろ操られているのではないかと最近危機意識を持ちまして、大学の授業を受けている時は鞆の中にしまってスマホを使わない忍耐力を養う、忍耐するというような訓練を積んでいます。

そういう我慢するということが大事なのかな。倉本聰はそう言っているのかなというふうに思いました。

[小山]

非常に謙虚に受け止めています。そういうふう気が付いているから、これからのあなたは伸びていきますよ。「これでいいのかな、俺はおかしいんじゃないかな」と気が付かないでやっていると問題で、倉本さんの提言というのはそういうことなのです。

### 「批評と創造」

やはり自分も文句ばかり言ってなかなか行動しなかったりする。理屈は言うけども行動が伴わない。

### 「批評と創造」「理屈と行動」

私も、前までは文句ばかり言って、すぐに行動に移さないとかが結構多くて、これまでの自分では駄目だなんて思って・・・まずその物に対してやってみよう。それから思ったことを伝えていければいいのかなと思ひ、文句を言う前にまず行動を起こしてみようと思ひ倉本さんの文を読んで思ひました。

## 「石油と水」「知識と知恵」

人間が生きていくのに、絶対に水は必要なのは当たり前なので、まずこの現代の文明というか便利な世界というのは、まず生きるための苦勞というのが全く必要のない状況だからこそ石油と水というところでちょっと頭によぎったことです。

知識と知恵については、今まで知識を蓄えてきたけど、それを実際に使って行動ができるのかと言われていて、それに対して自分たちは全く言葉を返すことができなくて、自分は知っていても、実際に使えていないなということを考えさせられました。

[小山]

いいですね。そのように実感することが大事なんです。「知識と知恵はどちらが大事ですか」と聞かれたら、まさにそうだなと思うし、「油と水はどっちが大事か」と聞かれたら、やはり生命を維持するうえでは、石油が無くては生きられるのですが、水が無いと生きられないですね。

ところで、皆さんは北海道の水資源の確保が問題だということを知っていますか？

山や川があり、冬には雪が降る北海道は、水の確保に困らないだろうと思われるかも知れませんが、このままではいずれ北海道に住んでいながら、水を買って飲まなくてはならない事態になることが懸念されています。何故だと思いますか？

「土地が海外資本で買われているという話はよく聞くんですけども、それに関連することですか？」

そうですね。時事問題をよく勉強していますね。今、特にアジア系の資本が北海道の水資源の重要な箇所を買って占めようとしています。特に倶知安、ニセコ、蘭越を始め空知のある部分などが買われています。私有地の売買だからと傍観してはいられないのです。こういう動きをなんとしても阻止しなければ、大変なことになります。北海道庁はやっと条例をつくりましたが……。

## 「当たり前のこと・・・言われなければ気づかない」

今まで当たり前感じていたこととか、当たり前で考えていたこと、当たり前で存在していたことの逆を対比する言葉で表すことによって、本来は見れば誰でも気づくのに言われなければ気づかないというのが悲しい現状なのかなと思います。

[小山]

倉本さんの言葉は、確かに当たり前のことだよ。改めて読んでみるとそうなんだな、ということに気づくことが大事です。

## 「自分の主体性は」

石油と水はどっちが大事ですか、と聞かれた時に、石油は無くては生きていけないけど、水が無いと生きていけないというふうな考えて水を選ぶと思うんですけど、普通に生活していて石油と水と言われたら、やっぱり石油が無いとストーブも付けられないし寒いと思って石油を選んじゃうかもしれないなということに気付いた。

結局、例えばお酒に酔っている人が酔っていてフラフラだけど自分は酔っていないと言うような感じで、なんか自分もそういう状況だったかなということに、この倉本さんのを読んで気づいて、すごいドキッとしました。



### 「文明に麻痺」

自分は現代の文明に頼り過ぎていると思った。ゲームとかテレビとかが好きなんですけど、たまにはそういうものを無くして生活するのもありかなと思ったり、次、理屈と行動というところなんですけど、自分から行動して・・・文句言ったり、人に頼ったことばかりだったので、自分から積極的に行動してみようと思いました。

### 「どっちも大事」

「どっちが大事ですか」と色々書いてありますが、私はどっちも大事だなと思いながら読みました。それぞれがないとそれぞれが成り立たないなということも思いました。

「車と足はどっちが大事ですか」というのも、足がないと車は動かせませんし。「知識と知恵」「批判と創造」とありますが、最近私の団のリーダー会議では、色々プログラムのことを考えていて、「これやりたいよね」「あれやりたいよね」ということは挙がってくるのですが、批判ばかり言う人もいます。でもそれを聞いて、「確かにやりたいけど、そういうこともあるよな」とか、その批判からちょっと学ぶとかということも考えました。

「あなたは感動を忘れていませんか」では、それが今の時代当たり前になっている。例えば、電気ひとつ点けるにも色々なエネルギーを使うわけで、東日本大震災の時、福島原発がひどい事になりましたけど、あれで節電はしなきゃいけないとなったとか、原子力の問題がどうだとか、エネルギーをどこから持ってくるのかということから考えなければいけなくなった。

その電気を点けることにも色々な過程があって、今に至っているというようなこと、そこにも感動があるのにもかかわらず、今は全然そういうことがないのかなということを考えながら読んでみました。

[小山]

どちらも大事だという受け止め方もありますね。どちらも大事だけど、強いて言えばどっちに重点を置いて生きるべきか、ということ倉本さんは問いかけていると思うのです。

### 「文明に麻痺」

今、自分はこれを読んで、どっぷり文明文化に麻痺していたなと思います。例えば仕事で、電話で聞けば早いものをすぐファックスをパソコンから送ってみたり、メールでやり取りしてみたり現代文化にそのまま流れちゃっている部分もある。

最近の自分で言うと、車と足？どっちが大切ですかって、これを読む前は車が好きだから車の方が大切かなと思っていたが、車に乗るには、運転するには足がなきゃ運転も出来ないし、いろんな部分で元々あった部分を大切にしながら今の便利な文明社会と向き合っていかなければと思い、新しい物は人間のただの欲になってしまうから、昔のものもちゃんと大切にしていけたらなと思いました。

[小山]

車と足、どっちが大事かという倉本さんの問いのもっと深い所には、結局便利だから車を使うわけだけれども、便利だからと言って車だけを使っていると足が弱っていく。足が弱いということは、人間の健康を維持する上で極めて大事なことを示唆しているのですが、車を使うと排気ガスなどの環境問題が生ずることへの警告でもあるのです。

## 「文明に麻痺」

どちらかというと文明というところで引かかったところがあって、やっぱり自分は文明に麻痺というか依存している部分というのはあるのかなと思ったのです。

スマホとかパソコンとかインターネットといったものを使って人と会話していたり、ゲーム、オンラインプレイといったもので遊んでたりとかもありますし、あとはインターネットだけじゃなくて電子レンジとか冷蔵庫、洗濯機、文明の家具とか機械とか、そういった物を使って生活をしているという部分もあるので、大まかに言うと電気という部分ですごく頼った生活をしているのかなと思った。

先ほど東日本大震災の話で原発という話が出ていたが、再利用できるエネルギー、再稼働どうするんだといった問題など、自分がたぶん知らないだけかもしれない。震災が起きる前にはこれらのことについてあまり取り上げられて無かったのではないかな。

便利な物は使うだけのリスクがあるということを考えながら、自分も含めてまだ考えが至っていなかったと思う。

なにかすごい上から視線も入っていて申し訳ないが、石油と水どっちが大事ですか、車と足どっちが大事ですか、批評と創造、批判といった部分も全部絡んでくるのかなと思いました。

[小山]

いいじゃないですか、自分で意外と気が付いていなかったけども、倉本さんの文章を読むことによって、そういう見方や考え方もあるのだなと気づくことが大事なのですよ。

あなた方のような20代で、そういうものの見方や考え方ができるようになると、将来が楽しみだね。

ありがとうございます。面白い、皆さんの発言、それぞれすごくいい受け止め方をしています。

## ＝変えるということ ～多援社会に向けて～＝

ボーイスカウトには教育理念があって、小学生のビーバー・カブから始まって指導者になるまでに体系化された手順にしたがい、活動するときは制服を着て、礼儀正しく、他の少年団よりもきちんとしているのに、なぜ広がって来なかったのか、それは単に子どもが少なくなったからなのだろうか、その原因を根本から考えてほしいのです。

倉本聡さんの起草案を読んだ感想の中で、“文句ばかり言って”ということが出ました。それじゃ自分は何をしたかという、それほど出来なかった。人間は基本的には自分を中心に、自分に都合の良い尺度で判断するのです。

「うちの隊長もう少しやってくればいいのになあ、なんぼ言ってもあまりやらないし・・・」自分でやらないくせに、すぐ隊長のせいにしてたり、誰かのせいにするのです。会社でも役所でも

「課長がもう少し良かったら、もっと変わるのにな」などということを目にしますが、自分は課長に何を言ったのかという、自分からは具体的な提言をしていないというのが一般的なのです。

青少年団体活動でも会社の経営でも常に先を見て変革の努力をしているのです。それがトップに立つ者の使命なのです。次のキャッチコピーは、会社が存続している頃の山一証券のものです。

Break through ここから、向こうへ切り拓くこと。先へ進むこと。超えてゆくこと。  
それが私たちの意志です。役目です。一歩二歩三歩。ここから、向こうへ。ここから、  
明日へ 【山一証券】

バブルの崩壊と同時に山一証券は廃業しました。今でも電気系統の会社や、銀行が次々と合併や売却をしています。かつては良い大学を出て、大きくて良い会社に就職するというのが願望でしたが、いまは、雇用形態も変わり、何が良い大学で、何が良い会社なのか分からないのです。

大事なのは、自分が本当に働きたいと思った会社に入ること、社員の数が多いか少ないか関係ないのです。札幌にだって社員が5、6人で年商何億も稼ぐ会社だってあるのです。

私達の時代は一度会社に入ったら定年まで働き、退職金を貰いましたが、今は終身雇用制度が崩れて、派遣社員制度など途中でどんどん臨時の人が入れ替わる形態になりました。ヘッドハンティングが当たり前の

ように行われています。定年までがんばってこの会社のために働くという意識はなくなったのです。そのことが社縁という人の繋がりが薄れ、無縁社会の形成にも関係しているのです。

少子化、超高齢化、非婚化、独居世帯の増加、スマホの普及など、人の縁がますます希薄になっています。どんどん進む無縁化の流れを断ち切るためには、地域の中のあらゆるものがそれぞれ出来ることから積極的に関わるといふ「多援」のシステムを構築することが必要なのです。もちろんボーイスカウトもそのひとつです。「無縁」から『多援』への流れを創ることです。団体活動の原点は、人とのつながり、支え合いなのです。【编者註：多援＝支援システムの構築】

ボーイスカウトには今、社会的に大きな使命があることを「若い風」の皆さんは認識することです。

## ＝変えるということ ～リーダーの資質～＝

企業は変化することによってのみ生存が可能となり、かつ発展を望み得る。

【日清製粉社】

「若い風」の皆さんは、変革のリーダーです。スカウトのマニュアルを時代の要請、地域の実情に沿って変えるといふことも必要なのです。

去年（2013年）の本屋大賞に選ばれた『海賊とよばれた男』という本を是非読んでほしい。出光興産の創始者出光佐三をモデルにして書かれたものですが、トップとしての資質はどうあるべきか、ということが、よくわかる本です。

## ＝変えるということ ～常識を覆す＝

「これまでにないデパートの常識を覆した空間」 【伊勢丹新宿本店】

新宿の伊勢丹がすごく大きく変わりました。これまでのデパートのイメージをまったく変えたのです。これまでにないデパートの常識を覆した空間ということで、伊勢丹のデパートってこんな風になったのというくらいに変えたのです。老舗のデパートが建ち並ぶ中での賭けです。

トップに立つ者としては、常に変化を目指しているのです。実践するということが大事なのです。

## ＝見つめてみよう！スカウティング＝

### ～君は何のためにスカウティングをしているのですか？～

- ◇ スカウティングをしないと困りますか？  
ボーイスカウトが無くなったら困る？急には困らないよね。でも入っているよね。
- ◇ スカウティングのメリットは何ですか？  
入っていていいことある？そういうのも改めて考えてみましょう。
- ◇ スカウティングは地域の人に認知されていますか？  
普段は制服を着ていないから分からない。でも、地域には子ども会だとか、スポーツ少年団とかいろいろの団体があるよね、地域での「青少年健全の集い」や「青少年の集い」などがある時、ボーイスカウトはどういう形で参加しているの？  
制服を着て参加しているの？全体の中で、どういう紹介のされ方をしているの？  
あまり意識したことないのであれば、考えてほしい。  
何をして市民に認知してもらえるのか？ どういうことをすることによって市民から感謝されると思う？ そこが今問われていると思います。
- ◇ スカウティングは小中高生に魅力ある団体活動と思われていますか？  
最初に言いました。考えてください。  
スカウティングは自分たちだけの活動をしていけばよいのですか？  
このことが、これからの活性化を図っていく上で一つのヒントになると思います。  
きちんと組織化され、クラス分けされ学ぶことが決まっている、それを順次今まではあなた方が受け継いできているのだと思う。

受け継いで最後のクラスまで行くのがボーイスカウトの活動だというふうに思い込んでいることは間違いではないが、地域の青少年団体として、もっと地域と結びついた他の役割もあるのだということを知ってほしい。

そのことが自分たちでさらに地域の子どもたちをどう引き込めるか、ボーイスカウトという組織をどう広げていけるか、ということにつながっていきます。

◇ スカウティングは、他の青少年団体とつながりを持たなくてもよいのですか？

全市の青少年を対象にした事業や多くの青少年が集う行事などに参加したり、年何回か地元のスポーツ少年団や子ども会とボーイスカウトが連携して何かイベントやキャンプなど、一体となった活動をしていますか。

特に私が連携してほしいと思うのは、地域の子ども会などが野外活動をやるときにはボーイスカウトが全面的に支えてあげる。てきぱきと仕切るくらいの働きをしてほしいと思います。さすが、ボーイスカウトの人たちの野外活動の技術はすごいなという印象を、地域子ども会のリーダーにも子どもたちにも強く持たせることなんです。

同じような事で、ボーイスカウトの指導者研修システムと内容は青少年団体指導者向けには、ほぼ完璧な内容なので、ボーイスカウトの内部的な事情が許す範囲で、一般の青少年団体の指導者も参加させてほしい。そういう活動の中から、新しい相互連携が生まれると思います。

◇ スカウティングが、地域社会の中で出来る貢献活動として、何がありますか？

高齢化が進み、独居高齢者が増えている状況の中で、地域の温かい心がつながる安全で安心な地域を作るために、ボーイスカウトに入っている自分たちは何ができるのか。あるいはボーイスカウトという青少年団体だから出来ることは何があるのか、ということについても是非議論してほしい。

◇ スカウティングの仲間を増やすためにどうすればよいのか？

北海道のスカウティングの停滞の原因を探る時に「れば・たら」にならないように。

こうだったら・・・何々していれば・・・など、自分で具体的に意見も出さないし行動もしないのに他人のせいにして、誰が悪い、彼が悪い、などと言うのを止めて、客観的に自分から意見を出して考え行動して行くことが重要です。

“新しい風” “若い風”・・・従来の枠組みや考え方を変えた発想に感動しました。

北海道連盟が今初めて使った“若い風”の発想がそのまま全国に普及していくような気がします。

## ＝豊かな人生は人との出会い＝

人生は出会いの連続だと思う。ボーイスカウト活動でも、学校、地域、職場でも、いろんな所での出会いが大事です。これからの財産は、お金でも物でも不動産でもないのです。自分の人生の中で、どれだけ多くの人に出会ったかという、出会った人の数が財産として蓄えられるのです。自分ひとりの力は知れています。多様な人脈が、豊かな人生を築くのです。

高校生は高校生なりに友達の輪を広げ、大学生は大学生なりに、社会人は社会人として人との出会いを広げ、深めてほしいと思います。風は、吹くまで待っていないで、吹かせるのです。





## ニアクションプランニ

講師の基調講演を受けて、2班に分かれて“朝までナマ討論”が行われました。

### 《ワークシート：解決策の策定》

班	A班	B班
タイトル	若手の活動と発展	続・若い風プロジェクト：オープンフォーラム
目的	若手を通して各団のスカウトと、その指導者、年配の指導者の意識を向上させる	ボーイスカウト活動に若い風がうねりを生み出そう
目標	① 年2回フォーラムを開く ② プログラム日誌の習慣をつける ③ 同世代同士で連絡を取り合う	① 若い風年代の結束を高めるため交流する場を設けて、それに参加することが大事 ② スカウティングに対する熱い思いをぶつけあい、自分を高める ③ ボーイスカウトのうねりを生み出すためにも、ボーイスカウトを好きになり、誇りに思う。
事業主体	若い風プロジェクト	若い風プロジェクト
スタッフ	若い風プロジェクト	若い風プロジェクト
協同組織	未定	
期 日	春と秋	3月と11月
場 所	頓宮（交通の便が良い）	* その時々ニーズに合わせて決める * 札幌の方が集まりやすければ札幌 * 継続性や持ち回り制で地方 * 参加しやすさを狙い地方
対 象 者	若い風年代	* ベンチャースカウトから28歳までを基本 聴講参加としてベンチャーも参画し、一緒に考え、行動する姿勢が大事
参加人数	160人（該当年代の登録者数）	
事業内容	<p>【春のフォーラム】冬の活動内容情報を共有</p> <p>【秋のフォーラム】夏の活動内容情報を共有</p> <p>【情報を共有する手段】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 「プログラム日誌」を作成 各団のボーイに書かせるのがいい</li> <li>◇ 活動情報の共有 プログラム日誌を使って、日時・場所・内容などを若い風同士で共有する</li> <li>◇ 共有情報の提供 共有した情報を、フォーラム非参加者や地区で共有できるように提供</li> </ul> <p>【情報共有のねらい】</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>◇ 得た情報をもとに各団で共同した活動</li> <li>◇ 一緒に活動を行うことによりスカウトの切磋琢磨</li> <li>◇ 他の団の情報を得ることで、指導者の意識が変わる</li> <li>◇ 情報の共有のみであればネットでも可能</li> <li>◇ 集まる意味を考える 同世代の仲間を作る 他地区の仲間が増えることで期待意識が高まる</li> </ul>	<p>【チェーンメールを送り付けます】</p> <p>メールを使って自分の熱い思いをまず友達や仲間そして隊指導者にぶつけてみる。それに対してアクションが返ってこなければやり方が間違ったのかなと思えばいい。アクションが返ってきたならば、それを取り入れて行こうというふうに高めていく。</p> <p>【年2回オープンフォーラムを開催】</p> <p>3月と11月。</p> <p>【若い後輩とも交流】</p> <p>将来的には若い風レベルの交流だけでなく、後輩に受け継いでいく、自分達が教えているスカウトレベルの子につなげていくことが大事。</p> <p>【ボーイスカウトを高めるうねりを生み出す】</p> <p>ボーイスカウトのこともっと知る必要があるので、ボーイスカウトをやっていない人からボーイスカウトは世間からどのように見られているのかを語ってもらう。</p> <p>そして、スカウティングを一緒に見つめ合い、高めていく。</p>
事業予算	未定	規模がまだわからないので未定

## ＝地域の良さを見つめてみよう（活動の視点を広げて）＝

昨日会った時の表情と、今朝の表情とはずいぶん違って見えます。つまり、昨日から今日にかけてあなた方はすごく成長しています。それは本当に驚くくらいです。人間はやる気になれば変わるのです。集まってお互いに腹を割って話し合いをしたことによって、若い風が吹き始めたことを、皆さんの顔を見て実感しました。

まとめる能力があり、展開の手順がきちんと出来ています。このことはあなた方の後に続く人たちに伝わっていくことと思います。

皆さん方の若い視点で世界に目を転じてみれば、ろくに“緑”もない国もあれば、そのまま飲めるきれいな水が無い国もあります。北海道、日本がいかにか素晴らしい国であるかを再認識し、環境を大切にすることが団体活動の使命でもあるのです。日本人が創りだした文化がいかにか優れたものであるかは、和紙や和食がユネスコの世界遺産に登録されたことが証明しています。

今、海外からの観光客の目的は、日本の景色ではなく、日本人の日常生活の様式や和食、着物、民家などを知りたいのです。日常の人々の暮らしぶりを見に来ているのです。

国内でも北海道は観光地としての人気が高いのですが、これから海外の人たちに、真の北海道の魅力とは何なのか、何をさせるのかということ、ボーイスカウトの活動を通じてアピールしてほしいものです。

## ＝出来ることを探そう（活動の変革を求めて）＝

企業の人たちの言葉を三つ紹介しましたが、どのような決意で企業を変えているのか理解できたと思います。昨日から今日にかけて、話し合いの中では、これはちょっと難しいよな、これは出来ないよな、ということも出ていましたが、「出来ないと思えば、出来ない」のですよ。

東京オリンピックの開幕に間に合うように東海道新幹線を実現した島秀雄さんは、国が示した当初の予算では出来ないことが初めから分かっていたのですが「出来ます」と断言したのです。島さんは「出来ないというよりは、出来ると言った方が楽である。出来ないと言えば、そのためのあらゆる条件を立証しなければならない。出来ると言えば、そのための知恵を出せばいい」と言っています。

初めから「とても無理だよ」と言ってしまうと、それで終わりですが、やってみようと思ったら、いろんな困難はあっても、どのようにしたらできるだろうかという知恵が出てきます。

それが昨日から今朝にかけてまとめた知恵が段々出てきているのです。今「はやぶさ2号」の打ち上げは天候の関係で延期しましたが、第1号を打ち上げた宇宙航空研究開発機構の川口教授がやはり島さんと同じことを言っています。「出来ない理由ではなく、出来る理由を私はいつも考えていました。大切なのは目標に向かって明るい展望を描き続けることなのかなと思います。」

## ＝奉仕活動とは（指導者の責務として）＝

ボランティアと奉仕の違いは、要するにボランティアは自分の意思で自由に参加することです。もっと簡単に言えば、人生におけるプレゼント交換みたいなものです。自分がボランティアをすることによって、相手からもしていただけるというプレゼント交換の喜びなのだと考えればいいのです。あくまでもそれは無償の行為であって、してあげる、とか、だからしてもらおう、というものではないのです。

それに対して、奉仕活動というのは、自分の意思とは必ずしも一緒ではないかもしれない。しかし、ボーイスカウトとして地域社会に常に貢献し、奉仕していくというのが団体の趣旨であれば、それは自分の主体的な意思でなくてもそれに参加して活動しなければならないのですから奉仕なのです。例えば学校のクラス行事として、火曜日に近くの公園のゴミ拾いをするので、軍手と火バサミを持ってくると先生から言われて参加したとすれば、それは担任が決めた話で、本当は自分は参加したくないが皆と一緒に清掃活動をしたというのは、ボランティア活動ではなくて奉仕活動です。

## ＝地域に見える活動、仲間の交流（組織拡充を求めて）＝

二つの班からは仲間の増やし方をどうするか、若い風の持続発展をどうするかという発表でした。

すぐにはできないかもしれないが、是非考えて欲しいことで、地域の中でボーイスカウトの存在をどういうふう認識してもらおうかという時に、たとえば、上川管内の当麻町では、地域の祭りの時には必ずボーイスカウトが交通整理、祭りの準備などの裏方役などに関わっているのです。だから、当麻町の祭りにはボー

イスカウトの姿が町民や子どもたちに認知されているのです。ぜひ、今回参加している人たちの地域での、祭りやイベント事業にどう関わられるか実践してください。

スカウト仲間の交流をどう図るかというのが課題になっていましたが、私が北海道教育委員会で社会教育を担当していた時に、14支庁管内全部ではないが、地域間で青年の交流をする「青年のバスツアー」という事業がありました。例えば貸し切りバスで、石狩管内の青年が胆振管内の苫小牧を訪問し、胆振管内の青年団体が苫小牧に集まりそれぞれ管内の青年団体活動を発表して交流会を行うことにより、お互いにすごく刺激を受けて、青年団体活動が活発になったということがありました。このような方法も是非考えて欲しい。

年2回皆が集まり研修をするのもいいが、他の地域の団が他の地域に行って交流する。それをバスで移動することに意味がある。各々の自家用車で行ってしまうと、ただ現地に集まったというだけの話だから、往復のバスの中で様々な研修交流が出来るので、できればバスを貸し切って交流すると、もっと道内の各団の活性化、掘り起しに繋がっていくのではないかなと思います。

## ＝ワークシートの活用を（体系的な思考を）＝

## ＝道は歩いて拓かれる（若い風の核に）＝

扇間コミッショナーからワークシートの記入を指示されましたが、このワークシートは、これからずっと皆さんが集まって何か計画するとか、話し合う時に活用してください。そうすると、どんどん系統的に話を進めながらまとめることができます。

それと今回集まった皆さんは、間違いなく若い風の核になる人です。これからも、「誰かがやってくれるだろう」「上の人への指示待ち」ではなく、自分からどんどん新しいことを提案して行けるリーダーになってほしいと思います。

道というのは、初めからあるものではないのです。歩く人が多くなれば道になるのです。皆さんが北海道のボーイスカウトの新しい道をつけるために、歩き続けることが必要なのです。

最後に1998年に北海道を全国にPRするために作成したキャッチフレーズを紹介しよう。

「一歩前に出る勇気があれば きっと何かが始まる 試される大地 北海道」

「若い風」の皆さんの、一歩前に出る勇気を期待しています。この二日間で成長した皆さんの姿に感動しました。



# 第56回 全道スカウティング研究協議会

実技体験を通じて子どもたちに楽しいプログラムを提供しよう！！  
“北海道のボーイスカウトに吹かせている新しい風”を検証しよう！

第56回全道スカウティング研究協議会は、平成26年10月25日(土)～26日(日)に、留萌地区：秩父別町 ちっぷゆう&ゆ／合宿研修施設おおとりで、全道各地から指導者71名が参加して開催されました。

初日の午後は、各コーナーでゲームの実技体験を楽しみ、日々の隊・団・地区活動での活用や、地域社会でボーイスカウト活動の普及事業等で活用できるツール・手法(準備、指導法等)を習得して、ドラえもののポケットに多くのひみつ道具を詰め込み、童心に返り楽しみました。

この実技体験は、「スカウトスキルを楽しみ、高める／一般の子どもたちを仲間に誘おう」のテーマのもと、日本連盟トレーナーが講師になり、『アウトドアチャレンジ「野外力検定」(日本連盟ホームページ参照)／スカウトゲーム(日本連盟刊行図書)』を教材に行いました。

ゲーム名	出典	ゲーム名	出典
目的地をさがせ	スカウトゲーム	動体視力	スカウトゲーム
丸太切り	野外力検定	重さどんぴしゃ	野外力検定
巻きむすび、もやいむすび	野外力検定	フラップジャック・フリッピング	スカウトゲーム
長さどんぴしゃ	野外力検定	ピンポンポン	スカウトゲーム

2日目の午前中は、地区コミッショナーがパネリストになり、扇間道連コミッショナーの司会で、「パネルフォーラム ～“新しい風”を検証しよう～」が行われ、地区・自団・自隊の現状を踏まえて話題提供をし、北海道のボーイスカウト運動推進のあり様を熱く語り合いました。論議の概要を紹介します。

## 《テーマ》

ボーイスカウトの教育特性とボーイスカウトブランドの復活のためには・・・

熱意・行動・態度

「自分の道を ふみしめて 人生勇気が 必要だ くじけりゃ誰かが 先に行く」とあるが、折角スカウターとしてこの世界に飛び込んだ道です、どうせ歩くのだったらしっかりと自分の道を踏みしめて歩こうではありませんか、

「あとから来たのに 追い越され 泣くのがいやなら さあ歩け」とあるが、大変有難いことで、若い世代にボーイスカウト運動をどうやって継承していくのか、そこに課題があるのではないのでしょうか

「なんにもしないで 生きるより 何かを求めて 生きようよ」とあるが、折角、ボーイスカウト活動に参画しているのだから、何かを求め若者の成長とこれからの北海道連盟を求めて行きましょう。

と、ボーイスカウト運動の推進は、テレビ番組水戸黄門の主題歌「あゝ人生に涙あり」と重なるのではないかと、この扇間道連コミッショナーの司会で、先ず課題提示がされました。

## 《課題提示》

### 〔熱意〕

- ◇ 活動がマンネリ化して、指導者の熱意が欠けていないだろうか
- ◇ どちらの方向に向かってボールを投げて、ボーイスカウト運動を行っているだろうか
- ◇ スカウト教育法から離れた展開をしていないだろうか

### 〔行動〕

- ◇ 平成25年10月に発表した、「北海道のボーイスカウト運動推進中期展望」での現状と課題について、認識して行動をしているだろうか
- ◇ 今年度の重点目標『隊・団が設定した教育目標・活動目標』に基づいた行動（活動）をしているだろうか

### 〔態度〕

- ◇ スカウト同士、指導者同士、保護者同士、そして、スカウトと指導者間、指導者と保護者間の態度は、教育活動に向かう態度になっているだろうか
- ◇ “ちかい”と“おきて”をもとに“思いやり心を持って、「セーフ・フロム・ハーム」「チャイルド・プロテクション」を意識したプログラムが展開されているだろうか
- ◇ 私達は子供たちに“ちかい”と“おきて”を基盤にと言っているが、指導者は“ちかい”と“おきて”を守り、おきてを8つまで言えて、漢字も間違えないで書くことができますか

## 1 『隊・団の教育目標と活動目標』の推進・課題・効果について

### (1) 教育目標・活動目標の設定と認識

#### ① 位置づけと認識

「中期展望」での“気付きから行動へ”の一環として、各団において教育目標・活動目標を立てボーイスカウトブランドとボーイスカウトの教育特性を生かしていかないと、生き残っていけないだろうとの危機感のもと推進しているが、これを今後どのような行動を起こしていこうかというのが今一つ見えていないような気がする。

#### ② 各団での認識

- ◇ 残念ながら各団で覚えている人がどれだけいるのだろうか、殆どのリーダーの認識が薄い。
- ◇ 従来やってきたことを文書にして出ただけで、やることはやっている。
- ◇ 決める段階で当初話し合いをしたが、中々意見が出てこないで付箋を配り書いてもらい、多かったものをまとめたファシリテーションをして決めた。  
声には出していないが、それぞれが熱いものを持っていることが分かった。

### (2) 教育目標・活動目標の推進

- ① RTで各隊・団の目標をもとに指導者が一丸となって取り進めようとしている。
- ② どのような子供に育てたいのかを明確に持つことにより「各自が行う目的・目標が明らかになり、スカウトの進歩を確実に」に推進することができる。
- ③ 団委員長の強い想いと、指導者の悩みやスカウトへの想いを教育目標に、団の課題を具体的に活動目標にしたので、団内の指導者、団委員が一致した理解と認識のもと推進している。
- ④ 教育目標は「行うことによって学ぼう！」と子ども向けに呼び掛ける表現にして、活動目標と合わせて、年間プログラム、団員名簿、毎回のプログラム実施計画書に書き込み、スカウト、指導者も日常的に認識するようにしている。

### (3) 教育目標・活動目標の効果 【体験・交流】

- ① カブ・ボーイ合同集会でボーイがロープのゲームを行なったら、休憩時間にカブの子がボーイの子

の部屋に押しかけロープ結びを教えてもらいに行っていた。ボーイも教えることで生き生き活動している。

- ② 「仲間を大切に」の教育目標で、部門を越えてスカウトの仲間を大切に思う心を育てて行く機会を増やしている  
小人数なのでCS、BS、VSの3隊をみていると、スカウトそれぞれが相互に作用しての成長が感じられる。
- ③ カブラリーで国旗開けの担当を体験・経験してから国旗掲揚に興味をもち、国旗を「掲げたい」「自分で結びたい」「降ろす時も外してたたむ所までやりたい」と言い出し、完全に出来なくても、ボーイの指導で体験させている。
- ④ ベンチャーに道連事業など、自団・自地区以外の事業に参加させた後の集会で、楽しかった部分と改善すべきと思う部分をかなり熱弁していて、物事をいろんな角度から見られるようになってきている姿を見て指導してきて嬉しく感じた。
- ⑤ 今まで他の地域や団と交流することが出来なかったが、他地区のラリーに参加して、子供達には刺激になった。このような機会をもっと増やしていかなければいけないと思った。
- ⑥ 制服を着て、「市民に見える活動」で街頭募金活動をした時、海外から来た観光客の人たちからボーイスカウトだと声をかけられ、国際的な活動だと実感した。
- ⑦ 教育目標を合言葉に、自分たちで考えて活動する、メリハリを付けて行動している。
- ⑧ 教育目標にもとづいて、活動・体験する機会を与えてやると、実施できるようになる、そして、これを見本にして次に続くスカウトが育てていく機会を与えてあげたい。

#### (4) 教育目標 【班制教育・パトロール】

- ① 班長訓練も班長会議も当然できない状態。集会の前に今日の班長を決めて、その班長が中心に動くようにしている。
- ② 部活をしていない中学生・帰宅部は無気力な感じがする。やる気満々の6年生を班長にすると、ますます中学生が後ろに引いてしまう。スカウトの構成により難しい状況もある。  
(その中学生には集会の前に教えて自信を持てるようにしているが・・・)
- ③ 性格もリーダーシップもまだ弱いと思っていた班長が、責任感が強くなり班集会の時熱を出していたが班長がいないと班集会ができないと出席していたので、指示だけを出して帰るように言い帰した。そのような動きを見ると感動しうれしく思う瞬間である
- ④ 一つの隊・団で活動するのは難しく、パトローリングは勿論なかなか成り立たない状態。活動の体験をしないでボーイを終わってしまうのはもったいないと思う。
- ⑤ 活動場所の整理整頓をボーイやベンチャーに任せて、備品の現状を把握させ良い効果が生まれた。
- ⑥ 北海道の現状は、1隊平均0.5個班、班員も3名や5名で、1人しかいない隊もある中で「班制教育」はどうあればいいのか、考えなければいけない。

#### (5) 教育目標 【野外活動】

- ① ファミリーキャンプは参加型で、ボーイスカウトのキャンプは参画型。パトローリングが実践されている。
- ② 教育目標で年間プログラムを見直し、野外活動を取り入れたものに取り組んでいる。
- ③ 「野外に出て活動する」としたが、雨天時のプログラムを立てていなかったり、立てたとしてもボーイらしい活動になっていたのかなという反省もあるが、継続的・意識的に行い定着しつつある。



## (6) 教育目標 【挨拶、仲良く】

- ① 教育目標の中に、「挨拶をしっかりしよう」というのが多く出ているが、カブラリーでは子供達もそうだが、指導者のあいさつの声が聞こえてこなかった
- ② 各隊の連携を強め、「強く正しく朗らかに」活動を行っている、ビーバーが入り友達をさそい徐々に増えつつあり、スカウトや保護者の期待に添うよう各隊と協力し合って合同の集会を行っている。
- ③ ボーイ隊に軽い障がいを持っているスカウトがおり、「仲良く協力して助け合って行こう」の教育目標で活動しているが、障がいをもった子ども他の子ども成長してわけへだてなく助け合い、隊のスカウトたちの笑顔がすごく素敵になった。

## (7) 指導者

- ① RTや他の団との交流、全道研などに参加していないから、一人よがりになっている指導者が増えている面がある。  
指導者同士が地区や道連に関わりをもたないと、スカウト教育法にもとづいて“行っているつもり”になっているのではないかと。
- ② 各種研修会、全道研、若者のつどいなど全て、人が集まる機会の参加人数が激減してきているのも事実である。  
ボーイスカウトの事について切磋琢磨して話し合いする事は大変大事であり、積極的に皆で討議しお互いに自分の悩みを話す場所、機会を大事にしていきたい。  
全道研や地区で他の団と交流して色々な方の話を聞くことが大切。
- ③ 息子年代、孫年代と一緒に活動する時代になっている。あきらめないで継続することが大事。
- ④ 近隣の団の指導者が忙しくて機能していないのでカバーしている。
- ⑤ 日本地図を思い浮かべると分かるように北海道は大きい、広域の中で大会等に参加するのは難しくなっており、ここ2年位地区のラリー等を近隣の皆さんに呼びかけて旅費の負担が少なく、少人数でも参加できるようにしており効果が出ているのではないかと。
- ⑥ スカウトブランド、教育特性を訴えているが、これがおざなりになっているのが事実ではないかと。
- ⑦ 大人の意識を変えようとしてやっている。成果が表れているかどうかは未だ分からないが、これからも継続して行きたいと思う。
- ⑧ 「すぐ手伝うな、口出すな、よく見よく聞きよく考えよ」を活動目標に、基本的な事は教えてあとは失敗しても班長や子どもたちに任せる、皆で考えることを生かせる環境を指導者たちは意識して作るようとしている。
- ⑨ 保護者に教育目標を示し理解を求めることで、年プロを計画するときから参加を得て活動の時も協力してもらえ、保護者の中に単なる手伝いから積極的に参画するという意識に変ってきている。

## 2 『若い風プロジェクトおよびベンチャー世代の育成』の推進・課題・効果について

### (1) 若い風プロジェクト

- ① 「若い風」は組織ではなく、18歳から25歳位までの人達を対象に、これからの北海道連盟を担う人材の育成を図るプロジェクト。  
若い風での経験を原隊に帰って、後輩育成のために出来るキッカケや研修の場所を提供しようとする活動。
- ② 「カブラリー」では、セレモニーやキャンプファイヤーなどのプログラムを主体的に担当し、「スカウトフォーラム、トライアルキャンプ」ではベンチャー年代の活動をアドバイス、「オープンフォーラム」では、自分たちのボーイスカウトを語り合う。

- ③ ローバー隊は全道50箇団の内8箇団にローバー隊があり、ローバースカウトとして隊・団での活動が行われる。

## (2) 効果と可能性

- ① カブラリーで大きな役割を果たし、新しい風が北海道連盟に強烈に流れてきて、時代を感じる。
- ② ベンチャー時代は、部活や塾などで十分な活動が出来なかったが、大学生になりある程度時間の余裕があり若い風に参加して新たに皆から吸収できたと感じている。
- ③ ベンチャーのトライアルキャンプで、生きたままの魚貝類や鶏、野菜を与えたら、刺身、つくね、鶏ガラスープ、カボチャでパンプキンスープなどの調理を行い、彼らは工夫してやれる知恵もっている、やり方を知っていることを改めて感じられて感動した。
- ④ 若い世代には機会を与えれば可能性が皆に広がって行くので、今後の若い風の活躍を期待したい。
- ⑤ 指導者がスカウトたちに負けないぞとの気概でやっていると、スカウトたちもいつかはリーダーを抜かしてやろうと言う気持ちが起き、活動が活発になってきている。
- ⑥ 昨年度の「アイヌ民族資料館でのキャンプ」から今年の「縄文遺跡でのキャンプ」と、目的を明確にしたトライアルキャンプが続いているのが良いことで、継続すべきである。
- ⑦ ベンチャー年代でのプログラムで企画、実施、評価したことを踏まえて、若い風として、カブラリーのセレモニーやトライアルキャンプなど若い風プロジェクトに生かされている事が良いと思う。
- ⑧ 若い風の人達には、言うべきところはチャント言って、色んな見方や評価をすることにより今後の可能性を考えると期待するものがすごく大きい。
- ⑨ 若い年代の人達がプログラムを作り事業を行っているのを、見守り、アドバイスするなど一つの事が出来上がるまでは大変で、待っている方はジッレットタイが、何かを作り実行するということが若い年代にとって達成感があると思う。  
それを見守る我々年配の指導者の役割、使命が重要になってくる。
- ⑩ 若い人たちの感覚で、ビーバースカウトという「生き物」はどんなものかを研究してビーバーラリー、ビーバーまつりを企画して欲しい。
- ⑪ これからの北海道のボーイカウト運動のため、若い感覚で楽しい活動をして欲しい。

## (3) 課題と展開

- ① 地区には20歳代の指導者はいない、30歳代が2名、40歳代が若干で50歳代以降が大半を占めており、若い風ならぬ、横風・老い風しか吹かない、
- ② スカウト経験者（体験者）などを元に戻る機会を作り登録すると良い。経験者（体験者）の中から発掘することにより地区にも若い風が吹いてくるのではないかな。
- ③ 地区にも、原隊にも若い年代の人があまりいない。北海道連盟で組織立ててプログラムを提供し、そこに地区から参加させいろんな刺激を持って帰り最終的には原隊で活躍してもらえるのが狙いでそうなるのが一番いい方法。
- ④ 18～25歳の北海道連盟を背負って行く人を今から育てておかないと先細りになる。  
研修や奉仕する機会が少なくなっているが、若い人がデビューする機会を多く設けて、先輩の方の経験・博識と合わせて、若い人がいると希望が持てるようにするべきである。
- ⑤ 基本は原隊で活動してもらおう。若い風で何か得たモノを持って帰って原隊で吹いてもらおうのが良いのではないかな。
- ⑥ 若い風は、指導者側で社会人としての扱いとなり、自分達で考えるのは勿論だが、社会的には新米であるので、物事をきちんと教える人がいないといけない。

- ⑦ 団によっては、若い指導者が外に出て行って余計な知恵を与えられても困る、ウチはウチのやり方があるからと、引き留めていることはないのか。  
その団なりのいろんな流儀があるが外に出して活動や経験の幅を広げてやる必要がある。
- ⑧ 若い風がプロジェクトを行うのを見守っていく方法と、それを仕向ける方法が難しいと感じた。
- ⑨ 地方では、高校を卒業すると殆どが地元から離れてしまうため、若い風メンバーになる人がいない。活発に活動しているような子たちが地元から出て行ってしまふのはもったいない。
- ⑩ 若い風のメンバーは、指導者の道を歩もうとしているが、スカウト活動の基本が出来ているのかといえば、そうは言い切れない部分があるのではないかと。  
例えばプロジェクトをPDCAサイクルで行ってきたのか、基本動作がキチンと出来るのか、歌もいろいろ覚えているのか。これらをちゃんと見てあげたうえで任せるべきで、確認しないで任せてしまったら、本人たちも困るのではないかと。
- ⑪ 若い人なりの判断基準、価値基準に任せてしまうと、本当に大丈夫なのかと言う時が来るかと思う。
- ⑫ 若いリーダーが活躍できる場で、どの程度のことを託するとよいのか、どのような事だったら引き受けてやってもらえるのか、人にモノを頼む時にとっても悩むことです。  
頼まれ、任され嬉しい反面、すごく不安な部分もあると思うが、若い人たちはどう感じているのか聞いてみたい。
- ⑬ カブラリーなどは助かったという話を聞くが、お手伝い団体になってはいけないのではないかと、若い風が他人のためでなく自分のために吹く風であることを期待したい。
- ⑭ ベンチャー事業を行って、彼らが盛り上がって年にもう1回やりたい、札幌以外でも開催したいとの要望がでてきている。  
予定していた回数より増えて旅費やお金の問題も絡んで地区や道連としても対応が難しい面があるが、彼らが正しい方向に盛り上がって行くのであれば支援していくべきである。
- ⑮ 少ないベンチャーが、北海道連盟が行う事業・活動を通して横の繋がりが出来て、札幌の大学などに進学した際に横の繋がりがそのまま継続され将来地元に戻って来た時に指導者になってくれることを期待したい。  
是非、この活動をもっともっと強い風にしていって欲しいと思い、支援して行きたいと思っている。

#### (4) まとめ

- ① 北海道の登録状況でボーイ年代が最も多く、年代が上がっていくに従い段々と減っていく。  
26年度でいうと、ビーバー97人、カブ236人、ボーイ273人、ベンチャー109人とガクツと減り、ローバーは8コ団で登録数は72人。その内、18歳から25歳位までの年代の人は約140名。この中には地元にはいないスカウトもいると思う。
- ② 連盟長のあいさつでも触れていたが、縄文時代の生活を通じて食生活を学ぶというコンセプトでトライアルキャンプをベンチャー対象に若い風メンバーがアドバイザーになり行ったが、感想文にこのことについて触れるスカウトが殆どいなかった。  
食材が多かった、調理に時間がかかった、スマホを使っている者が多かったなど現象的な部分に関心がいき、その時代の食の有難味とか、モノの大切さということに関して感想を書いたスカウトは少なかった現状がある。
- ③ 彼らの動きを見てもセレモニーのスタイルや、いま参加している事業への感じ方など原隊の指導者が教え指導してきていないことを如実に分かったような気がする。  
若い風年代が研修する場所、キッカケが特に必要だと思う。  
18歳以上はまさしく指導者なので指導者としてのスキル、任務、方法を学ぶ場を提供していかなければならない。  
11月のオープンフォーラムでは、スキルも含めて彼らにボーイスカウトの今後の有り方についても議論をしてもらおう。今後を期待して欲しい。

### 3 『中期展望：気づきから行動へ』の現状について

#### (1) 目標に向かう

言われたから、とりあえず教育目標・活動目標を作ったが、日々の活動に追われてしまう部分少なからずある。

目標として掲げた以上、その目標、最終ゴール、着地点に向かって活動プロセスを考えていかないと、本来望まれるスカウトの姿が見えてこないのではないかと。

子どもたちがどうなって欲しいのかなというのを自分にないと、子供達も楽しくないし、どうして良いか分からないものは効果が無い、仕事もスカウト活動も同様にこれらの事を考えて行動する。

#### (2) 自分の楽しさを伝える

自分がスカウト活動をやっているのは楽しいからやっているのであって、それを皆に教えてあげたい。

ボーイやベンチャー年代の時から地区とのつながりや研修や大会で友達が出来て、信頼や競争心が起き続けていることを、自分がみている子供達に伝えてやりたいと思い活動を続けている。

#### (3) 「ちかい」と「おきて」への気付き

子供たちには「ちかい」と「おきて」の実践を行うと言っているが、気付く子供もいれば気づかない子供もいる。

気付かない子供の方が多いので、日々の活動でこちらからキチンと認識する機会を提供してあげたらいいなと思う。

#### (4) コミュニケーション

スカウトと自分なりにコミュニケーションが取れているつもりだが、スカウトと歳が近い分甘えてしまう部分もあるので、今後その辺の所に気をつけて行きたいと思う。

研修会、ラリー、大会などで知り合ったリーダー同士の、縦のつながりよりも横のつながりが大事だと痛感している。

#### (5) ノンフォーマル教育

日本連盟の元総コミッショナー杉原さんが、全国県連コミ会議で「ボーイスカウトはノンフォーマル教育で、学校や家庭でできない教育をしているが、学校で何を教えているのか指導者の皆さんは知っていますか。日本の教育の中にはあえて道徳を取り込んでいる。その中身を我々は知る必要があるのではないかと。カブなどはしつけという言葉を使うが、学校では段階に応じた道徳教育がなされている。子供たちの教科書を見て参考になるのではないかと述べていました。

#### (6) 北海道連盟の役割

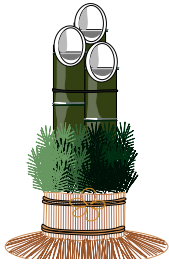
- ① “気づきから行動へ” は、もちろん最終的には原隊・自団の活動で熱意をもって行動する態度がなければ先に進まない。

行動するキッカケとして地区あるいは北海道連盟が支援できる機会を作っていきたいと考えている。

- ② 皆さんの方から、こうして欲しい、北海道連盟でこういう事業をやってほしいという要望を出していただきたい。

地区に定型外の研修・訓練を依頼しても提案が出される状況にない。是非、イン サービス サポート、団訪問、含めて相談していただきたい。

- ③ 組織的、活動的には負のスパイラルに陥っているが、活動を求めている子供がいる以上可能性があるのであって、北海道連盟は原隊で頑張りましょう、そのため若い連中、若い風を何とか伸ばしましょう、そのためここにおられる皆さん方を中心に支援体制を組みましょう。ということでやっているので力添えをいただきたい。



# 群羊弥栄



2015 新春 誌上賀詞交換

スカウトの仲間を増やして  
運動の拡がりを！！

北海道連盟 連盟長  
北海道連盟 先達

## 三浦 武

赤平市

北海道連盟維持財団 常任理事  
北海道連盟 相談役  
北海道スカウトクラブ 副会長

## 入 部 道 之

### 謹賀新年

スカウトの目線で活動しよう！  
日本ボーイスカウト北海道連盟 理事長

## 長岡 正彦



## 新春弥栄！

北海道連盟副理事長 留萌地区委員長

## 三 国 久 介

新春のお慶びを申し上げます  
石狩地区

顧 問	原田 裕	越中 勉
地区協議会長	箱島 盈	
地区委員長	小林 幸治	
地区副委員長	高塚 浄正	林 謙治
会 計	猪股 巖	
事 務 長	猪口 信幸	
地区コミッショナー	飯田 康弘	

### 謹賀新年！

スカウトに楽しいプログラムを！

日本ボーイスカウト北海道連盟

副理事長 **下田 好徳**

あけまして

おめでとーございませす

平成二十七年 元旦



札幌第1団 カブ隊副長

小笠原 清行

あけましておめでとーございませす

胆 振 地 区

一 地 区 役 員 一

地区協議会会長	滝口 信喜
地区協議会副会長	熊野 正宏
地区委員会委員長	木原 靖之
室蘭第1団 団委員長	高橋 忠義
室蘭第4団 団委員長	田中 洋一
登別第1団 団委員長	木原 靖之
伊達第1団 団委員長	辻 正博
苫小牧第2団 団委員長	永井 承邦
コミッショナー	村中 啓子
副コミッショナー	月館 良治
事務 長	小笠原 貢
事務 次 長	渡邊 昌彦
地区 会 計	佐藤 公英
総務委員会副委員長	亀岡 富信
スカウト委員会副委員長	松橋 恵一
リーダー委員会副委員長	猪股 瑞彦
プロジェクト委員会副委員長	西岡 浩
地区 監 事	鷲沢 義則
地区 監 事	津田 和明

一 北 海 道 連 盟 役 員 一

地区選出理事	木原 靖之
副 理 事 長	下田 好徳
名 誉 会 議 員	高木 康
相 談 役	高田 道夫
参 与	塩谷 真守
参 与	佐藤 公英
参 与	西岡 浩

事務局 〒050-0065

室蘭市本輪西町3丁目22番12号

電話・FAX (0143) 55-2876

北海道連盟監事  
札幌地区副委員長  
札幌第4団団委員長

北 秀 継



# 新春弥栄

真狩野営場をご利用下さい



札幌地区協議会  
札幌地区委員会

# 謹賀新年

旭川地区協議会

顧問	野原 典雄
顧問	川村 武雄
顧問	森 豊

地区協議会長	松倉 信乗
地区委員長	高橋 明
地区副委員長	山口 淳
野営行事委員長	山口 淳
組織拡張委員長	高橋 明
リーダー委員長	町田 清
野営場運営委員長	天満 昇
財政委員長	仙座 猛
会計	金澤 利寛
事務長	浅野 玲子
監事	菅原 エミ子

地区コミッショナー	村上 政義
副コミッショナー	宮澤 多佳子
副コミッショナー	杉田 肇

# 新年！弥栄！！ 留萌地区

留萌第1団	団委員長	櫛井 二三夫
留萌第2団	団委員長	下田 満
秩父別第1団	団委員長	寺迫 公裕
羽幌第2団	団委員長	小寺 克彦
稚内第2団	団委員長	前田 義彦
地区協議会長		櫛井 二三夫
地区委員長		三国 久介
地区コミッショナー		小笠原 祐治

# 謹賀新年

上川地区委員会

地区委員長 小西 恒

# 謹賀新年！

今年もよろしくお願ひいたします

ボーイスカウト北海道連盟

札幌第9団

育成会長	岩佐 眞
育成会副会長	北野 義城
団委員長	樟本 賢首
副団委員長	北野 和

札幌第12団 副団委員長 岡田 聰



## 新春自戒

飛べ！！ 札幌第10団

スカウト・指導者・団委員一同

## 謹賀新年

札幌第26団 団委員長

前田 和道

2015

## 新春弥栄

ともに“光の路”を歩みましょう！

十勝地区

## 帯広第4団

育成会長 渡邊 伸夫

団委員長 尾張 景

「北海道カブラリー」では、  
大変お世話になりました

指導者・スカウト・保護者一同

## 賀 春

ボーイスカウト北網地区協議会

会 長 桜田 正文

副会長 越前屋 勝雄

ボーイスカウト北網地区委員会

委 員 長 鴨下 泰久

副委員長 遠藤 昌昭

北網地区コミッショナー

得能 和成

副コミッショナー

松谷 政史

加藤 由麻

～One for All, All for Patrol～

日本ボーイスカウト北海道連盟

コミッショナー **清水 義明**

～ビーバー・カブテキストの活用を～

日本ボーイスカウト北海道連盟

副コミッショナー **飛鳥 慶子**

**新春弥栄！**

日本ボーイスカウト北海道連盟

常任理事 **北野 和**

研修に参加してスキルアップを

日本ボーイスカウト北海道連盟

常任理事 **池田 君松**

**新春弥栄！**

日本ボーイスカウト北海道連盟

常任理事 **徳永 教好**

～新しい時代に生きるスカウト教育～  
視野を広め地域と繋がる 2015

北海道連盟事務局

常任理事 **扇間 康弘**  
事務局長 **中本 亨**



**JAPAN 2015**

23rd WORLD SCOUT JAMBOREE SCOUT MONDIAL

和 第23回 世界スカウトジャンボリー

日本派遣団（参加者）／大会運営スタッフ（IST） 第2次募集締め切り

平成27年2月末日（日本連盟）

日本派遣団参加隊副長の交替参加、大会運営スタッフ(IST)の部分参加、遅参・早退参加が可能になりました。生涯の思い出に23WSJに参加しましょう。

詳しくは北海道連盟事務局にお問い合わせください。

**「みんなで第23回世界スカウトジャンボリーを成功させよう」**

**協賛金募集中！！ ご協力をお願いします。**

登録加盟員個人のほか、商工会議所、企業、団体・ロータリークラブ、ライオンズクラブの方々などのご協力を戴いております。ご協力をお願いします。詳しいことは北海道連盟事務局へ。ご寄附は「特定公益増進法人」への寄付、財務大臣指定寄付金として、税制優遇措置が利用できます。

## 参考にしましょう！！ 子供たちを育む国民・道民運動

私たちは、子どもたちへの教育活動を行っています。  
行政機関を始め多くの団体・機関が子供たちの幸せを願い、様々な運動を展開しています。  
その一部を紹介します。 私たちの活動を進める上での参考にしましょう！！

### 早ね早おき朝ごはん運動



子どもたちが健やかに成長していくためには、適切な運動、調和のとれた食事、十分な休養・睡眠が大切です。

子どもがこうした生活習慣を身に付けていくためには家庭の果たすべき役割が大きいのですが、最近の子どもたちを見ると、「よく体を動かし、よく食べ、よく眠る」という成長期の子どもにとって当たり前で必要不可欠な基本的な生活習慣が大きく乱れています。

こうした基本的な生活習慣の乱れが、学習意欲や体力、気力の低下の要因の一つとして指摘されています。

このような状況を見ると、家庭における食事や睡眠などの乱れは、個々の家庭や子どもの問題として見過ごすことなく、社会全体の問題として地域による、一丸となった取り組みを進め、子どもの基本的な生活習慣の確立や生活リズムの向上を図ります。

朝食を食べないと集中力が低下し、イライラするといったことが起こってしまいます。

朝食でブドウ糖をはじめとする様々な栄養素を補給し、午前中からしっかり活動できる状態をつくるのが大切です。

睡眠には心身の疲労を回復させる働きのほかに、体を成長させたり、頭を良くする働きがあります。

朝の光を浴びると、脳の覚醒を促すホルモンが活発に分泌され、頭がスッキリと目覚め、集中力があがり、活動に適した体になります。

朝の光を浴びて、昼に活動を行うことにより、夜はよく眠ることができるようになります。

子供の体力が低下しており、その向上のためには適切な睡眠、食事、運動が大切であることや、近年小学校1～2年生から学級崩壊が生じているように、家庭や地域の教育力が低下し、幼児期の基本的な生活習慣の確立やしつけが十分になされておらず、「地域総ぐるみ」での教育再生への取り組みが求められています。

「早寝早起き朝ごはん」運動は、幼児期からの基本的な生活習慣の確立を目指しています。

【提唱：文部科学省 推進：「早寝早起き朝ごはん」全国協議会】



# 体験の風をおこそう

社会が豊かで便利になる中で、子どもたちの自然体験、社会体験、生活体験などの体験が減少しています。子どもたちの健やかな成長にとって体験がいかに重要であるかを広く家庭や社会に伝え、社会全体で体験活動を推進する機運を高める運動です。

子どもの頃の体験は豊かな人生の基盤になり、様々な体験が豊富な人ほど、大人になってからのやる気や生きがい、モラルや人間関係能力などの資質・能力が高い傾向にあります。

子どもたちの健やかな成長には普段からの、友だちとの遊び、お手伝いや地域での活動などが大切で、自然の中での体験活動が豊かな子どもの方が、学力調査の平均正答率が高い傾向にあります。

社会全体で子どもたちに体験活動の機会を提供し、子どもたちの健やかな成長を図ります。

体験の風をおこそう推進月間（10月）事業や、「全国統一イベントデー・子ども体験遊びリンピック」にエントリーして、子どもと家族が参加できる様々な体験活動を行います。

北海道では、少年自然の家、青年の家、市町村、市町村教育委員会、町民センター、スポーツセンター、幼稚園、小中学校、PTA、青少年育成団体などで、平成25年度は574事業が行なわれています。

【提唱：独立行政法人国立青少年教育振興機構 推進：体験の風をおこそう運動推進委員会】



## 子供のための情報モラル育成プロジェクト ～考えよう 家族みんなで スマホのルール～

子供たちのメディア環境が大きく変化が生じており、スマートフォン等の長時間使用による生活習慣の乱れや不適切な利用による青少年の犯罪被害、さらにプライバシー上の問題等につながるケースが増えています。

子供たちのスマートフォンなどの利用によるネット依存や、SNS等の利用に伴うトラブル等の課題やスマートフォンの利用について家族で考えることを提案するキャンペーンです。

家庭で、学校で、社会で、子供たちの情報モラルの育成する取組を推進します。

【提唱：文部科学省 推進：趣旨に賛同する企業、団体等】

## 毎月第3日曜日は「道民家庭の日」

「家庭」は、家族の温かい人間関係を通して、子ども達が基本的な規範意識や生活習慣を学ぶ場であり、人間形成の出発点ともなるものです。

毎月第3日曜日は「道民家庭の日」として、家庭が果たす役割の重要性を再認識して家族が団らんできる機会を持つ日です。

「道民家庭の日」が家庭から地域へ、地域から社会全体へと普及し、毎日毎日が「道民家庭の日」となり、「心豊かな青少年を育む環境づくり」に努めます。

そのため、家庭、学校、地域社会、職場、行政がそれぞれの役割を再認識し、相互に綿密な連携を図りながら、青少年育成の環境づくりをなお一層推進します。

【提唱：公益財団法人北海道青少年育成協会】



## =TOPICS=

### 《アフターフォーラムを開催》

毎年開催しています「北海道スカウトフォーラム」で、熱心な討議がされ宣言文は採択されますが、具体的な行動〔アクションプランの実践〕に結び付きませんでした。

2014年北海道スカウトフォーラム採択テーマ『社会に飛び込め道産子ベンチャー』と第20回全国スカウトフォーラム宣言を受けて、具体的な「アクションプラン：行動計画」と「トライアルキャンプのテーマ」を決める《アフターフォーラム》を3月下旬、旭川市内で開催します。

開催要項が決まり次第、各団あてに連絡します。多くのベンチャースカウトの参加を期待します。

### 《27年度の運動方針、事業計画への意見を》

平成27年度の「北海道のボーイスカウト運動推進方針／活動・事業計画」の検討素案を各地区委員長・地区コミッショナーにお届けしてあります。

800名を超えるスカウトたちのため、地域社会の期待に応えるため、27年度の運動・活動についてのご意見を1月末までに北海道連盟事務局にお寄せください。

\*（検討素案冊子）をご希望の方は、北海道連盟事務局にご連絡ください。

### 《進級時期・カブ修得課目改正は27年4月から》

27年4月から、進級時期やカブ部門やボーイ部門の初級課目改正が施行されます。

移行方法・記章類変更などについての疑問は、地区コミッショナーにご相談ください。地区コミッショナーは状況により北海道連盟事務局に連絡をください。

### 《ユニフォーム改定は27年9月以降》

新ユニフォームへの移行は27年9月販売開始からです。完全移行期間終了は平成30年3月末日です。

4月の上進、新入隊者は原則として現行のユニフォームを着用することになりますが、移行期間への措置は各団の判断で対応してください。

なお、新ユニフォーム用に新たに制定される「所属連盟章」などは、現行のユニフォームに付けることはできません。

### 《27年度継続登録締め切りは3月13日（金）※厳守》

27年度継続登録申請・共済関係の書類等が各団あてに日本連盟から直送されていますが、3月13日（金）までに日本連盟に登録申請、日本連盟登録専用口座に登録料送金および、北海道連盟に「北海道連盟分担金計算書送付（FAX・メール添付可）」「北海道連盟分担金納入」のすべてが完了するようにしてください。

なお、「北海道連盟分担金計算書」「振込払込書（手数料加入者負担）」を1月に各団あて送付します。

### 【編集後記】

◇ 2014年のノーベル平和賞をパキスタンで女子教育の権利を求め、イスラム過激派に銃撃されたマララ・ユスフザイさん（17歳）と、インドで労働を強いられる子どもを救出してきた人権活動家カイラシユ・サティアティさん（60歳）が受賞されました。

一方、平均的な所得の半分を下回る世帯で暮らす18歳未満の子供の割合を示す「子どもの貧困率」が、平成24年度時点で16.3%と過去最悪を更新したことが厚生労働省から発表されました。

お二人の方が、ノーベル平和賞を受賞された理由について、また、厚生労働省が発表した日本の子供の6人に1人が貧困という事実に、子供達の幸せを願い活動している者として目を背けてはいけないと思います。

◇ 『話す場所 スマホじゃないんだ 食卓だ』～大切な子どもたちの未来に届けるメッセージ～

斧の響き 150号（平成27年1月1日発行）

発行・印刷：日本ボーイスカウト北海道連盟／発行責任者：北海道連盟 理事長 長岡 正彦

〒062-0934 札幌市豊平区平岸4条14丁目3-40 北海道ボーイスカウト会館内

Tel 011-823-7121／Fax 011-814-9377 E-Mail bs-douren@bz04.plala.or.jp

北海道連盟公式HP <http://www.bs-douren.org/>